
メモリーズファイター

はくりえる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メモリーズファイター

【Nコード】

N34750

【作者名】

はくりえる

【あらすじ】

君はレッドメモリーブローカーを知っているか？

二人組みの記憶泥棒で今の世界を成り立たせているメモリーバンクを作ったある女発明家の子供達だ。

今この世界には記憶が自由に入れ替えが出来る場所がある。

それがメモリーバンク。

メモリーバンク設立から30年・・・。

創立者の思いを秘めた赤髪の二人の子供の目的とは？！

あの夜のあの日（前書き）

ここでは初めての掲載となります。
よろしければ是非見てください！

あの夜のあの日

ヒトの記憶の中にはおっそろしいくらいの情報が詰まってる。

まあそれくらいは誰もが知っているだろう。

でも、その大切な記憶をある程度必要性が無くなったとき、またいつでも取り出せるように保管できる所があるというのはご存知だろうか……。

ここは今とは少し次元の違う場所……

しかしほとんど今の世界と変わらない日本。

「おい！逃げるぞ！」

黒い服に赤い髪の少年が片手ほどのカプセルを持って走っている。

「ま、待って……」

そのあとをツインテールの赤い髪の少女が追う。

急にサイレンがなり始める。

「いたぞ！」

野太い男性の声がする。

ここはメモリーバンク。

昔、アルビデス・マジュラデアという女性発明家が人間の記憶をカプセルに閉じ込め、自由に脳の中の記憶を操ることが出来るようになってからもう30年が経った。

いまやその技術は世界中に広がり、いたる所にメモリーバンクがたっている。

「そつちに回れ！あのカプセルはあの在り処に関することがはいっているんだ！」

警察らしき人々も現れ赤髪の子供を探している。

「残念だったなあ！」

町の教会の上に二人のシルエットが見える。

「これはかえしてもらおう。」

「だまれ！お前らにはその価値がわかっておらぬのらう？それが解読できればこの世界はもっと・・・」

白髪の神父が叫ぶ。

「キヤハハハハ！私たちのことを知ってるんでしょ？だったら価値くらいわかるに決ってるじゃない！」

「レッドメモリーブローカー！！！！」

銃声が響く。

「ま、俺らにもタイムリミットがあるんでな、じゃあな。」

そう言つとあたりが閃光のようにひかり二人は忽然と姿を消した。

あの夜のあの日（後書き）

また続きものせますので見てやってください

変わらない今日の頃(前書き)

続きです！

変わらない今日この頃

すがすがしいくらいのまぶしい太陽。

制服姿の学生たちが通る浅間町の学園通りは朝からにぎわっている。そんななかぼけつと遅刻ギリギリなのにもかかわらず歩いてるヤツが一人。

俺である。

「よーっす！今日も遅刻かい？赤鷲！」

自転車で俺の前をクラスの前が笑いながら通り過ぎていく。

「ああ。須田ちゃんに言つといてくれよ。ちよつと道案内してたつて。」

須田ちゃんとは俺の通う浅間ヶ丘中学校の3年5組の担任だ。

やさしそうな外見とはウラハラにとても厳しい先生で、俺は遅刻魔のため毎朝須田ちゃんに怒られているというわけである。

「おう！じゃあまた後でな！」

なんとやさしいやつらだ。でも出来れば自転車も一台置いていつて欲しかった。

まあともかく朝は眠い。

遅刻をしない奴らは自転車通学の奴らにきまつてる。

徒歩通のことも考えて欲しいものだ。

「まったく……。ぜんぜんといっていいほど反省していませんね？赤鷲……。紀伊^{きい}くん。」

須田ちゃんはにっこりと笑顔を俺に笑顔を向けている。

「あ、あれ……。えーと……。山崎とか桑本に理由言つといたんですけど」

山崎も桑本もさつき通りですれちがった。

「ああ、あなたの言い訳もだいぶ実現性のあるものになってきましたね。まあ、もう亡くなることの出来る親戚のかたは居られないはずですからね。」

ちなみにおれは言い訳で叔父や叔母を5、6人殺している。

それより、あいつらをいいやつだと思つたおれが馬鹿だつた……。
「まったく……。髪も赤いからあなたは学校側から目を付けられているというのに……。」

「須田ちゃ〜ん俺も髪赤いけど？」

他の男子達が5、6人立ち上がる。

ここらで赤髪は珍しいものではない。全校生徒の約4割は赤髪である。

あとの6割は黒、茶、金と……。という具合に結構人種様々で全体的に見れば赤毛のほうが多いくらいだ。

「いまレッドメモリーブローカーという泥棒がうるついているからです。まあ羽帰来さんも安池さんもそんな泥棒とはかけ離れたとても良い生徒ということは私が保証しますので安心してくださいね。」

赤鷲くん。もう時間がないので始めます。座りなさい。」

俺はふらふら席に着く。

はぁ……。今日も長い一日になりそうだ……。

「ただいまぁ。」

「あ、おかえり。なんか今日はあつた？」

俺は小さく古ぼけた小屋のような家で一つ下の妹と二人で暮らしている。

母さんはもう死んでるし、父さんは殺された。

母さんのほうはここらの人じゃないし、妹の愛実めぐみが生まれてすぐ死んじゃったらしいから俺も良く知らない。

父さんのほうも5年前突然姿を現したと思つたら次の日には遺体で

発見された。

「いや、怒られたくらいだけど？メグは？」

「見て！どこにあるかわかったの！ほら・・・」

メグは地図を取り出し、チェックしてある部分を指差した。

「ここ。セントネリア博物館。いままでメモリーバンクばかり探してたから見つからなかったみたい。」

「さあつて。今日もいつてきますかね。」

俺は鏡の裏の隠し扉に手をつつこんで黒いハットをかぶった。

「失われし記憶を奪い返しにー」

・・・母さんは死ぬ前に父さんへこういい残した。

「私がしてしまった過ちを子供達に償わせるのは最低なことだと思うけど・・・お願い・・・。私のメモリーカプセルはこの世界の様々な企業に売られていったわ。それをすべて見つけてほしいの。私の記憶だけは他と違うカプセルに入ってるからすぐにわかるはず。そしてそれらをすべて見つけたら、家の地下倉庫の端の隠し通路を進んでさらにそこにある螺旋階段を下ったところにそのカプセルがすべてびったり入る機械があるの。そこにそのすべてをいれて白いボタンを押すの。そうすれば・・・」

その後は俺も父さんもメグも知らない。

まあ多分そのカプセルの中の記憶が吹っ飛ぶのだろうというかんじに予想はしている。

俺は・・・いや、俺らはすべてをつぐなわなきゃならないんだ・・・

変わらない今日この頃（後書き）

また読んでいただけるとうれしいです!!!!

過去と償いのロンド（前書き）

遅くなりましたが続きです！

過去と償いのロンド

「で、聞いてなかったけどセントネリアのどこにあるの？」
俺は黒い手袋をはめながらメグにたずねる。

「あれ？いつてなかったっけ？」
メグは首をかしげる。ツインテールにした髪の毛がゆっくりと揺れる。

「セントネリア博物館はおにちゃんも知っているとおりすごく大きいところなのよ。だから展示施設と補修施設、そしてその他のものが保管されている倉庫の大きく分けて三つの施設すべてを合わせてセントネリア博物館と言うの。」
そんなもんに興味もない俺はへえへえと軽くうなずいた。

「・・・。どうでもいいって顔してるね。じゃあ教えてあげないよ。メモリーカプセルの場所。」

「いやいやいや！それ一番重要だろっ！！」
シラツとした目でメグが俺を見る。

「しょうがないわねえ。全く！ま、あたしだけじゃ無理だし教えてあげる。この中で一番大きな施設にあるのよ。」

「！つまり展示・・・」

「はい。さんねくん。倉庫でした！」

「・・・。」

「お兄ちゃんのはるか。」

「いいだろっ！こういうの調べんのはメグの役だろ？」

「しかも帽子傾いてるし。」

「これはそういうおしゃれなんだよ！」

「お兄ちゃんがそんなかつこしてもだめね。アホみたい。キザ！
そんなこんなで言い合いついていちゃ話になんねえ。」

「とつとといくぞー！」

「うん！」

こうして裏の窓からこつそりと二人は家を後にした。

「てかさ、もうちょっと隠れていったほうがいいんじゃない？」

メグはあたりに警戒して歩く。

そんなこたあ別にいい。見つかったって逃げる自信があるし。

そんなこんなぼそぼそ言ってるといきなり顔をライトで照らされた。

「こんな時間に何をやっている!!!」

やべ。

「お巡りさん。大丈夫ですよ。今から帰るところなんです。」

「しかもその格好……。お前らもレッドメモリーブローカーのフ

アンか？」

「は？」

「そうそう！そうなんですよお。彼氏ともに大好きでえ!!」

俺の「は？」をかき消す勢いでメグは俺の腕に抱きつく。

俺はなんだ。あれか？彼氏役？

そんなことはどうでもいいと言う風に警官のおじさんは首を振った。

「見る。お前ら以外にまだいるんだよ。あんな怪盗好きが。」

おっさんは数メートル離れたベンチを照らす。

うわ。俺とメグの格好したやつらが6人。

なんだかちよつと照れる……。

「つつ!!!!!!」

ぼけぼけしているとメグのひじがクリーンヒット!!

「どうした？」

「いえ……。俺らみたいな人がこんなにいてうれしいなと感激して……。

」

「馬鹿かお前。俺はな、お前らみたいなのを強制する役目もあるんだぞ。こい!!」

おっさんはどうやら俺らが本物なのに全く気がついていないみたい

だ。

俺とメグを強引にひっぱると手首とベンチを手錠でつないだ。

「よし、これでいい。俺はこれからまわりみてくつから逃げようなんてすんなよ。」

それだけいうとおっさんはのっそのそと闇に姿を消した。

「あんたらも運が悪かったな。みつかつちゃうなんてよ。」

俺の衣装に似せた服を着た少年が話しかけてきた。

「それにしてもよくできてんな。あんたらかなりのファン？」

「ま、似たもの同士話しようぜ。ってお前紀伊か?!」

やべ。。。。まさか。。。。。。。

「俺だよ！山崎！てか今いんのクラスのメンバーなんだぜ！お前もメモリーブローカー好きだったのかよ?!かつこいいよなあ！今度語ろうぜ！つかお前にあつてんな。。。。ってそちらの彼女さんは？メグが呆れた目で山崎を見る。

「さっきの聞いてたの？私彼女じゃないよ。妹。さっきのは嘘。」

「まじ？お前妹いたのか?!おい紹介してくれよ」

「は。。。。。」

どうやらベンチに繋がれてた6人は俺のクラスのやつだった。

山崎、桑本、浜山さん、七期さん、緑内、礼記さん。

女子三人はみんなメグの格好。男子三人はみんな俺の格好をしてる。

女子みんなかわいいけど礼記さんかわいい。

男子のメンツも結構イケメンぞろい。

「てかなんでこんなとこに？」

「俺ら実は隠れファンなんだ！」

そうだな。俺もしんなかったよ。

「ファンってばれたらまずいでしょ。。。。?でもこうやって服まねしたりしてるとなんか元気もらえるんだ。。。。。」

浜山さんが照れながら話した。か、かわいい。。。。。

「でも捕まっちゃった。。。。。はあ。。。。。親に怒られちゃうわ。。。。。」

。。。。。

礼記さんがうつむく。いやー俺が助け出す！！！！

「で、紀伊はなんでこんなところでそんな格好妹としてんだよ？」
「はっ！！！！！！！！！！」

「ちょっとお兄ちゃん！もうしょうがないわ……。ねえ、先輩方。約束してほしいの。」

6人はきよとんとしている。

「は？……。ああ。いわねえよ。お前らがファンだってことは……」

「ちがうつつーの！だあかあ……。」

「俺らが本物なの！！」

「私たちが本物なの！！」

6人は真顔になったかと思うといきなり笑い出した。

「お前……。大丈夫か……。」

何で信じてくれねえんだよ！！！！

「だめよ。お兄ちゃん。時間がない。急がなくなっちゃ。」

そついうとメグは手錠の鎖を引きちぎった。

「俺のも頼む。」

「うん。」

ばらばらになった鎖を見てようやく6人は本当だとわかったようだ。

「本当に……。？ほ、本……。」

「詳しいことはまた明日学校でな。じゃ。」

メグは内緒よと一言言つと6にんの手錠も引きちぎった。

おっそろしい怪力だ。

妹にはどうしてもかなう気がしないんだよなあ……。

「さ、いくわよ！」

過去と償いのロンド（後書き）

続く！！読んで下されば光栄です！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3475o/>

メモリーズファイター

2011年6月13日07時55分発行